**世阿弥研究会18年4月28日(土)　振り返りと考察**

目次

一、河村博重先生のお話 1～9頁

1) 五月の観世会の案内と「青嵐大会」について

2) 片山定期能の様子に関して

3) 18時30分からの予定に関する話題に関して

4) JAXA×京都大学「宇宙時代の人間・社会・文化」に関して

5) 民博での比較文明学会の話題

6) 参加をされた皆さんの自己紹介など

7) 鎌田先生の第一詩集に関して

二、「知二習道一事」(習道を知ること)の続き 9～27頁

三、「上手之知レ感事」(上手の感を知ること) 27～32頁

四、感想および考察と次回の予定 32～33頁

参考文献・資料一覧 33～36頁

**一、河村博重先生のお話**

**1) 五月の観世会の案内と「青嵐大会」について**

今日はpresentがあって、5月の観世会の切符と、これはねamateurの人の発表会で、中にある白いticketはお昼ぐらいにお赤飯を配るんです。それで2階席でお茶席があって、見所の2階でお抹茶とかお菓子が出ます。はい。

それと後、これが「面白会報」の5月号です。ああ。

それで今日、私、18時30分くらいに1人お稽古があるので。

そっちが先やったんですわ。

鎌田さんが、日があかんようになって。

**2) 片山定期能の様子に関して**

今日もあの片山定期があったんです。

そうですか、舞台をなさっていたんですか。はい。

どうもご苦労様です。

分林さんの『雲林院』というのと、今の九郎右衛門さんの御子息の清愛ちゃんの『小鍛治』というのがあったんです。

**3) 18時30分からの予定に関する話題に関して**

新学期のざわざわが少し。自分は齢をとっていくけれど、学生は永遠に18歳が入ってくるのね。はい。

僕、18時30分に1人お稽古の人が来はるので、それでちょっと抜けますので。

その人はね。造形の能楽部のOBで、仕事はね、gameとか作っていはるのですわ。はい。

こういうような。Computerの。Computerの、game softを作ったりしている。

**4) JAXA×京都大学「宇宙時代の人間・社会・文化」に関して**

それでその西岡君に色々とcopyをしたりしてもらっているのです。

これはね、この前に、昔に鎌田さんと沖縄のconvention centerで能を舞ったことがあったんです。あ、見てみたい。

チラシのcopyがこれなんですけれど。



立花隆さんの能舞「宇宙」すごいtitleですね。

Titleはね、鎌田さんがいつも。

JAXAの宇宙飛行士。へー。

僕は良いのです、面を着けているから顔が分からない。

ああ、誰だかこれじゃあ分からないですね。誰だか分からないでしょう。

皆さんと同じhotelに泊まったけれども、飲みに行っても誰だか分からない。

2011年の6月7日というとまだ日本がざわついているというか、ねぇ、地震で大変な時でしたよね。色んな試みをなさっているんですね。その時の、能の本にちょろっとこれが出たりしていたのです。これは何だったかな。

科学と芸術、阪本 成一という天文学者。



2011年というと、私まだ全然、京都と何の縁もない時ですね。

これはね、安室奈美恵がconcertをした場所なんです。えー、凄い。

2000年くらいですかね、こういう感じでした。それで一番最初に、openingで、それから色々な対談とかがあったんです。ふーん。

それがねあの会場に、後ろのback screenに本当のJAXAが写した地球とか月の映像がね、流れているんです。それ、素敵ですね。その前で。ちょっとあの、何と言うかSFみたいな。

その時は、装束を着けて舞いました。能装束。それで後、田茂井廣道さんに手伝ってもらって。

あー、結構色んな試みがね、高倉さんが書いている。

高倉さんももう良い年ですよね。ああ。ふーん。

どんな話題だったんでしょうね。

でも、来た時にJAXAのcalendarだったりposterが置いてあったので、あ、何か関わっていらっしゃるんだなー、くらいに思っていました。

だから京大のねあれと、JAXAのやつとか、毎年、色々なところでやってはるみたいですけれど。「お寺で宇宙」みたいな、何か講演みたいなのも一緒に、『古事記』の時もJAXAと組んでやっていらっしゃいましたよね。そうですか。

ええ、あれが2012年なので、古事記編纂1300年なので色んな試みをなさっている。

JAXA×京都大学「宇宙時代の人間・社会・文化」。相変わらず。鎌田先生はお忙しいから。

**5) 民博での比較文明学会第38回研究例会の話題**

5月の6日でしたっけ、日曜日に民博で比較文明学会ってありますよね。

あっ、そうですか。あっでも、足立さんは比較文明学会は会計だけで、会員ではないのですよね。会員ではないんです。

久しぶりに民博でやるな、と思って、ちょっと興味を持っていたんですけれど。

私も民博へはどうしても行きたいな、と思って。良いでしょう、だから。

でも私6日に、10日に論文の発表があるんですよ。あらまぁー。

その原稿を6日中に出さないといけない。じゃあ無理だ。もうちょっと早くに書き上げることができれば良いのですけれど。会員でなくても行けますよね。私も行けるかどうかは分からないんですけれど、やっぱり民博の資料って凄いんですよ。

今また太陽の塔が入れるようになっていますよね。そうなんですか、私まだ入ったことがない。

あ、岡本太郎ですね。申し込みが1カ月か2カ月先でないと。

だってそんなに入れないもの、あそこ人数。

1回に何十人しか入れないという感じですよね。

時間になったので、そろそろ始めましょうか。どうしましょうか。

鎌田先生も30分遅れる。ただわれらで読んでも、ちょっと。

もうちょっと待てば来るんじゃないかな、少し早めに来そうな気がするけどな、今の文面だと。

**6)** **参加をされた皆さんの自己紹介など**

どうも。

あれ、秋丸さん、今日lectureじゃなかったの。

なんの。勝又さん。

勝又さん、先週。先週。

今日はちょっと、新人を。ちょっとこの前にご紹介させて頂きました。河村先生、あの滋賀医科大学の3年生なんですけれど。三澤さんですよね。

鎌田先生の御親友の河村先生。能楽師です。

今日は、みなさんにね、能のticketを差し上げています。

あら。これは5月の、私が舞う訳ではないですけれど。

はいはい。これが岡崎の観世会館で、私は「葵上」という曲の地謡で出ます。まず皆さんに紹介をしないと。簡単にまた紹介をしてください。

そうですね、あの滋賀医大の昨年の「芸術学」という講座の受講生で、ちょっとおもしろい執事の方です。

名前を。

三澤史明と申します。今、滋賀医科大学の3年で、もともと慶應義塾大学の法学部を卒業しまして、東京大学の公共政策大学院に、もともと公務員になろうと思っていたんです。

そこからちょっと色々とありまして、滋賀医科大学へ入学しました。

この間とは全然雰囲気が違う。そうですか。

この前、どうだったかな。この前も、こんな感じだったかなと。えー、だいぶ違う。

ありましたよね、そちらの大学の。そうそう鎌田先生の何だっけ。

「聖地研究」ですね。

龍谷大学のあの時に来られていた方。

初めての人もおられるし、皆さん全部自己紹介をしましょうか。

それで時間を。そちらから。はい。

どうも、初めまして。近藤祐介といいます。いつもですね、こちらの世阿弥研究会の振り返りの報告書なんかを作らせて頂いて、それを皆さんの所にお送りさせて頂いたりやっているところです。それで私も元々研究していたのは法律学からでありまして、その後に公共政策を龍谷大学で学んだんですが、京都発の地域資格ということで地域公共政策士の勉強と研究とをさせて頂いて参りました。資格の方もこの間に取得をさせて頂いたところでありまして、宜しくお願いします。

足立順子です。今はあの京都大学の大学院のM2になりました。

まぁ、とにかく今年、論文を出さなきゃいけないので、一応、大きな枠としては「祈り」ということを研究しています。

能楽のことも入れたいなと思っておりまして、河村先生に色々とご指導を頂いております。

今、滋賀医大の非常勤の「美術史」を教えております、秋丸と言います。今年で3年目になります。宜しくお願いします。あれ、上智大学でも教えていらっしゃいますよね。

ああ、上智も後期はありますよね。

私は山梨大学の教育学部でdanceと体育哲学というのを教えております木村と言います。

私の中では、Eurythmyの専門家というimageが強いのですけれども。

あ、Eurythmyのimageがやっぱり強いのですね。

この間ね、一切Eurythmyのmethodを使わないで踊ってみたんですよ。

今までにない展開ですね。

うん、はっきり言うと発狂danceっていう感じなんだけれど。

いやいやいや。

なんかもう何かの技術に頼っちゃうと、もう駄目なんですよ。

それをちょっとやってみたら、結構評判が良くって、鎮魂をちょっとやってみたんです。

それは表でEurythmyではありませんと言っていて内面ではEurythmyだったとか。ないない、一切ないです。前提をやめちゃって、そして、あの本当に造形している、感情での造形ということをやってみたんです。

それで後、鎮魂、前あの稲盛でやった時には、鎮魂の表現をやったんですね。

そうしたら鎌田先生、それは駄目だと。あら。

それで私、そういうのは怖いって言ったんですね。

本気でやるのは嫌だから。鎌田先生はそうでしょうね。

だから、今回は本気で死んだ女の子の慰霊の気持ちで、ちょっと怖かったですね、やっぱし。

うーん、そうですね。この能の世界も祈りと鎮魂ですからね。

あまり本気になると、これは怖いなと自分で思って、ちょっとstopperを掛けて、やったということです。

踊る時にやっぱし、普通じゃない精神状態になってくるということですか。

今回は鐘の役の人がいたり、「チーン」と鳴らしてくれる人が居たり、起こしてくれる人が居たりなので、割と結界が出来る中で遊んだという感じで、後、現実に戻さないといけないので。

あと余り入りすぎると、変なものが出て来ちゃうので余計。

そうですね。ちょっとstopperを掛けて。

最後は、遊んで、上に上げておしまいみたいな。

はじめてやって、結構、能的ってこういう世界だなと思って。

そうですね。

能と演劇との大きな違いは、まず仮面を着けることなんです。

それと、主役の多くは、あの世の人なんです。うーん。

それで前場では、謎の女とかお爺さんのようなものが出て来るのですけれども、最初にそこに居はるのはお坊さんが居はるのです。

お坊さんというのか、shamanに謎の女が話しかけて、ある物語をして、そして実はその主人公は私ですと言って、弔ってくださいと言って、前場が終わる。

そして弔っていると、夕方から夜にかけて、在りし日の姿で出て来ると。

そして明け方に、戻ると。一言でいうたら、吸血鬼と一緒なんです。

あの世の人っちゅうのは活躍できるのは夜なんです。

それで朝になったら帰るというのがまぁ、世阿弥の作った夢幻能なんです。それがお坊さんの夢だったのだろうかということで終わる。ふーん。

能楽師の河村博重です。

初舞台は4歳の時にやらせてもらいました。

この舞台で初舞台をしました。

舞台は今、築60何年くらいになるんですけれども、ここで生まれて来たんです。

僕の実家なんです。

この舞台は、うちのお爺さんの代で建てたんですけれども、日本で一番古い西本願寺にある信長が建てた北舞台と秀吉が建てた南舞台の写しなんです。

この舞台、うちの父は、何と言うかな、芸には物凄く熱心でしたのですけれども、他genreとのjointにもopenに貸していたことがあったのです。

それで観世会館の方では、理事会に掛けてしないといけないのでなかなか難しいのですけれども、うちの所は個人の舞台だから、この能舞台でたとえば、pantomimeをやったり落語の会をやったり、劇団そとばこまちという人の劇をやったり、劇団黒テントというのをやったり、美空ひばりさんも来はりました。それからここでテレビの「山村美紗殺人事件」の何かがあって父が舞ったり、最近ではBelly danceかな、Belly danceをやったり色んなことをしています。

先生見ました。

Gorbachevさんも来てはります。すごいですよね、美空ひばりもGorbachevも。

そういうあの、下地があるので鎌田先生と能舞を。そうですね。

それでBelly danceの場合には裸足があかんので、足袋を履いてやらんとあかんのです。

へー凄いな。すごいavant-gardeな。うん、avant-gardeですね本当に。

それで後、古賀さんの自己紹介。

先生、今年も造形大で教えていらっしゃるのですか。

ええっとね、1年生の選択授業はもう終わったんですけれども、あと集中授業とか秋に7回くらいやるとか、あと能楽部とかを教えています。

造形大でも教えておられるのです。ああ、そうですか。

造形大学は、縁があったのは、あのもう亡くなられたんですけれど観世榮夫先生という人が教えておられて、その助手をうちの46歳で亡くなった兄の信重がしていたんです。

亡くなったので後に助手がいないようになったので、それで、私が助手になってそれが榮夫先生の晩年ですが。

観世榮夫先生というのは、今やったら野村萬斎さんのやっていることの走りみたいな感じで、それでもその当時は能楽界では他genreとの何とかというのはtabooやったのです。だから、観世流の流儀なんですけれども、観世流をやめて、喜多流にいったり、あるいはunder groundの劇を一緒に立ち上げたり、テレビに出たり映画に出たり、何かこう演出をしたりと色々なことをされていた先生なんです。

だから造形大学が出来た時に、榮夫先生が能の事で頼まれて、今思ったらもう凄い授業なんです。能を今まで見たことのない人に、高度な『藤戸』という曲を舞わせたり、それもシテの役もあるし、ワキの役もあるし、あるいは演出の人もいたり、照明の人もいたりする。

それと後、劇で「彦市(ひこいち)ばなし」というのを舞ったり、違う授業では三島由紀夫さんの「近代能楽集」を学生にさせたりというような授業でした。

河村先生は造形大学の時には、鎌田先生とは。

一緒ではなかったんですよ。何で知ったかと言ったら、あの、今の造形のclubのOBの子が鎌田さんの授業を取っていたので、僕に会わせたいというようなことで知ったのです。ああ。

一番最初は、その五条か何かにある釜のところで鎌田さんの講演と歌があった時に見に行ったのです。その時に、初めて知りました。ああ、そうだったんですね。

それから鎌田さんから、何か連絡があって、世阿弥研究会というのをするから参加して欲しいというようなことを。

僕は1回こっきしになると思ったら、これだけ続いたのです。

何年目ですか、今年が。10年目くらいじゃないですかね。ははは。

結構になりますね。ああ、そうでしたか。

それからまた鎌田さんからの依頼があって、新作能を京都大学でやってくれとかいうのがあったのだけれども、僕はそこまで才能がないから、色々と考えて鎌田さんのguitarで舞うと。

それはいつぐらい。

そうですね、最初はだから、京都大学の総合博物館で。

Singer song writerをもじって、神道song writerとしてCDも2枚ほど作っておられる。それがなかなかね、合うんですよ。ふふふふ。

不思議に。それで今まで10回、宮城県とかでも2回。JAXSAとかでも。

これはJAXSAの時の資料。私それ見てみたい。先生、後で貸して。

ちょっと貸せないので、これをdubbingしてもらわないと、これは。

あるいは、ここから300ｍほど北に上がったところに、武本さんという竹林のところがあって、そこでも。

虚白院。虚白院の竹をbackに能舞を舞ったり。

武本さんともそれで仲良くなって、年に何回か一緒に飲みに行ったりしているんです。

鎌田先生はもともと造形大の先生で、その後京都大学に来られた先生なんです。

武本さんは「演劇史」とか書いておられる。いえいえ、違います。

実業家の方でしたよね。

もともと日本人ではないんです。もともと韓国やったか何かで。大陸の。大陸の。

普通あり得ないですよね。やっぱり。

しかも沖縄。2011年だから、そんなに前でもないでしょう。

色んなところで、面白かったのは、あの、北野天満宮の所ですね。そうですね、北野天満宮。一応、私は企画という立場で、あの、やなぎ みわさんがtrailerの上で河村先生と鎌田先生

が能舞をされたんです。うん、あれ綺麗だったしね。

雪でなんか全然動かなくなった、とか、そんな裏の話しはされていて。充実した会でしたね。凄い寒かったけれども、評判でしたね。

あれは本当はね仮面を掛けると視野が狭くなってしまうので、最後は仮面でしたのですけれども、だから、1つは鎌田さんにこっちに立ってもらわないといけなくて、そしてこっちには、stand mikeに塀か何かを付けてそれで分かるようにしていたのです。色々とね、あの時のこれ。

凄いですね。何かこの階段をね、降りて来る時にハラハラハラハラとしていて。

だってあれ見えない中で河村先生が降りて来て。「こわーい」と思って。

凄いですよね、舞った後で。

そして古賀さんの紹介。

しばらく参加しておりませんでしたので、だいぶになりますが、河村先生の弟子なんですけれども、不肖のって言いますか、先生。

いや、古賀さんの企画で、大谷本廟でさしてもらったことがありましたよね。ああ、そうそう。

それであれは誰だったかな。

重森三果さんと言って、重森三玲さんのお孫さん。

その人に新内をして頂いて、琵琶で、まぁ原稿は私が書いたんですけれど、それで琵琶に曲を付けて頂いてそれで先生に能舞を。

舞台ってどこにあるんですか。舞台じゃなくて、大谷大学のところ。黒谷です先生。黒谷。ああ黒谷。黒谷はね、能の『敦盛』とものすごく所縁のあるところなんです。

結局は『敦盛』と『二人静』とかそんなのを舞いました。

だいたい皆さんを舞台の上でしか見えないから、間近で見ました。ふーん。

そうですね、近い席でいつもだいたい鎌田先生、される時には近いですよね。

ここら辺を歩いていく。あれー、触れそうな、と。

いや、なかなかね、matchしている。世阿弥が生きていたら、ああいう感じだったんとちがうのかなと、特に初期の頃には。

**7) 鎌田先生の第一詩集に関して**

どうも、遅くなりました。

はい、来られました。

私、7月に詩集を出すので、みなさん、第一詩集なので、買って下さいね。

第1詩集ですかね。そうだよ。

でも1番最初に出したのは詩集じゃなかったですかね。

あれはね、詩集というよりも小説というか叙事詩というか神話詩集というか。

なるほど。所謂、詩集ではないのですよ。なるほど。

私の意識の中では詩集だけれど、詩集としては評価されていないからね。

なので、そういう意味では。どこから出したのですか。思潮社から。

一地番新しいのは、昨日比叡山で作ったやつ。

先生は書かれているでしょう、あの、俳句も歌も。

いや、俳句は、歌は継続的に書いているけれど、詩は継続的に書いている訳ではない。

波があるので。歌はね、割と、どかっとやっているけれど、こういう現代詩とは言えないと思うんだけれどね。ちょっとやっぱり、独自の古来詩で現代詩とは言い難いよね。

何と名付けて良いのか、分からない。

それはあのどういったお話しの経緯で、出版社から「詩集を出しませんか」っていう話だったんですか。それは色んな不思議な縁があって、担当者が「みどり」さんという方だったとか。

「みどり」さん。あっ「みどり」の縁で、greenのあれで。色んな「縁」があって。

へー。不思議な「縁」ですね。

**二、「知二習道一事」(習道を知ること)の続き　「208頁16行目～210頁5行目」**

はい、ここは能の花をどうやって咲かせることができるかという、「一旦の花」というとまぁ『風姿花伝』の中で「時分の花」と言っていたよね、「時分の花」に対して「真の花」はどうやったら咲くのかということを修練のprocess、修練の仕方の中から説いているところですね。

それで若い人が、能の稽古をしている時に、注意しなければいけないのは転読だ。

転読というのは色んな神社やお寺でやりますが『大般若経』という凄く長いお経を「パーッ」と開いて、その部分、部分をちょこっと読んで、そして、全部を短時間で読んだという略式の作法ですね。全部読むと何十時間も掛かるものを、短い時間でやる。

そういう風な略式芸になってしまったら駄目だということですね。略式芸にならないように、ちゃんとものの順序を踏んで、基礎練みたいなところから徐々に徐々に身に付けて行くみたいなものを習得していく。

そうするとまず二曲、次に三体。

三体も次に老体・女体・軍体という3つがあるので、その順序がある訳ですね。

軍体というのはその一番最後に来るのだと。だからまず、老体・女体の順序でしょうね。

老体・女体の順序で学んだ後に軍体にきて、その軍体も力動風みたいな力強く荒っぽいものは一番後回しにする。

その荒っぽいものは何で後回しになるかと言うと、能は何よりも優美さを大事にするので「幽玄」とか「花」とかいうものを感じさせないものは軍体になっても駄目で、力動風になっても駄目なので、幽玄さというものが身に付くまでそういうものは後回しにしていく。

最初に軍体をやると見栄えの良い、たとえば『船弁慶』とかね「パーッ」と派手派手なものをみんなの前でやると見えが良いから、dramaticでspectacleな部分を見せることができるので一見、興味深く、上手そうに見えるのですけれども、能としては全然、修練が出来ていないみたいなね。

それは、一時的な花、ここでは「一旦の花」は生まれるけれど、絶対に成長しないということ。これはあの、すごく注意するべきことです。

注意するべきことなのはですね、名人になるためにはこう、順序を疎かにしてはいけないということと、基本的なことを疎かにしては絶対に名人にはなれないということですよね。

なので、一時的な花とか、略式芸とかそういう風なことで一時はこう「パーッ」と人気が出たり、面白い、珍しいと言われても絶対にその後に下がってくるということですね。

名人になることは絶対にない。

なので、珍しいとかちょっと「奇襲作戦」みたいなものを自分なりに上手く人を驚かせるような見せ方をしていくらやっていても駄目だよということを後半の方も言っていますね。

それで、大事なのは古いものも新しいものを交えると非常に珍しくなると。

能は珍しきが花だと、面白きが花だと『風姿花伝』で言っていたように、新鮮さというのか、何かこう「はっ」とするものがなければならない。

でも「はっ」とする部分は古い部分にもあるし、新しい部分にもある。

それで珍しいという感情や感覚を引き起こすためには、色んな珍しさの醸し出し方がある。たとえば、前の演者がmajorで来たら、minorを持ってくるとか。

前の演者が、rhythmがup tempoで「ぱーっ」ときたら、敢えてballade風のslow tempoでいってみるとか。前の演者がup tempoでやろうとしているのに、同じup tempoにしたら単調になってしまったり二番煎じの繰り返しのようになって印象が薄いじゃないですか。

それと、何か新鮮に映るような組み合わせというものを常にしなくてはいけない。

それから貴人が来たり演者の都合ではなくて、観客の都合で場面も切り替えていかなきゃいけないということは何度も言われているように、観客の動きによって、今までゆるゆるとしていたものをちょっとupにした方が良いとか、そういう臨機応変な判断も必要になって来る。

突然、雨が降ってきた時にも、そういう風なものに対応していかなきゃいけない。こういう風なことも、その場で珍しさを生み出すためには色々な工夫をしなければいけない。

そして、新しい要素を古きものに交えた時に、新しいものも古いものも生きると。

この事例にですね、私は「仰げば尊し」とか大好きなんですが、「仰げば尊し、わが師の恩。・・・」と、それをたまには家で歌うんですよね。でも人前でも歌いたくなるんですよね。でもまぁ、「仰げば尊し」をそのまま歌うと懐かしいだけなんだけれど、それをこうrock調で「仰げば尊し」みたいなことをやると、違う新鮮さがあるんですよ。

それで時々rock調で「仰げば尊し」とかを歌うことが自分一人でいる時でもあるんですよ。それで河村さんと2回、石巻の神社で能舞、鎮魂能舞いを奉納したんですね。

2つ目の鎮魂能舞の時には語りを入れて、その語りの中に「赤い靴」を入れたんですね。

あれは何と言っていた。

「赤い靴、履いてた女の子、異人さんに連れられて行っちゃった」。

Titleは何と言った。「赤い靴」。

あの大川小学校の子どもたちが波に「ばーっ」と呑まれてさらわれた。

その対岸でやった鎮魂能舞の時に、大川小学校の子どもたちというimageがあるものですから、子どもたちが波に呑まれて死んでいって、先生たちも死んでいって、今大きな訴訟になっているところですが。

そこのところの鎮魂や語りというものを考えた時に、そこに「赤い靴履いてた」というのを童謡っぽくではなくてrock調でね、入れることによって赤い靴も変化するし、語りの調子もそれによって違うdynamismも持つみたいな。

成功しているかどうかは分かりませんが、私にとっては自分の中で、地震が起こった物語とか古いちょっと懐かしいようなものを歌っているのに、「赤い靴」がrock調で入ってくると、自分の中でもう一つ火花が散るというか展開があるのですよ。

聞いてくれている人、記憶にある人はいますか。

何回も聞きました。

「赤い靴」の、私自身はその歌は童謡で、日本だったらその歌は結構majorだと思うんですけれど、唐突に出て来た感じが逆になかったんですよ。童謡をここに入れたとかそういう感じじゃなくって、凄くその意図も素直に入ってきた感じで「行っちゃった」というそこですね。「連れられて行っちゃった」という。

津波が連れて行ったというところにかぶる訳ですよね。

異人さんというのは、海の力みたいな。

この詩を作った人も「赤い靴履いてた女の子」に何かが行ってしまうことを託したんじゃないかなってちょっと思いましたね。

自分が持っていた一番大切な可愛いものがどこかにいってしまう、そのつらさみたいなものが、「行っちゃった」と女の子が象徴しているようにあって、その元歌のその意図を先生がrock調のところに入れているような感じがしたのですが。

この歌の作者は野口雨情じゃなかったでしょうか。

野口雨情だったかどうかは分かりませんが、こういうのは一種の引用ですよね。引用と略式は違うんですよね。

引用の場合には古いものを引用して新しい形式に、古い形式を新しい入れ物に入れた時に何か良い具合いになるという事例があったら、経験を。

その前に、「仰げば尊し」のrock調って、THE STALINの同じ歌があって。

私はこれ聞いたことがない。

それ聞いていないでしょう。それは聞いていないですね。

聞いていないでやるから、だからおかしい。何か同じことをやっているんだけれど、何かずれている。本当。それはYoutubeで見られる。見られるはずですよ。

ああ、今度見てみる。

たぶんStalin時代だったかどっちかで、遠藤ミチロウさんが歌っているのはrock調でrock調なんだけれども何か変なopera調みたいな感じだった。

あまりrockじゃないのだけれども、基本的なideaは同じだと思うのだけれども、何かずれているな、と。

私はね、東京自由大学で何度か歌ったことがあるんですよ。

東京自由大学の3分間の「終わった後講座＆ open café」といってね、3分間で全てね、好きなような自由表現が出来る。

まぁ、僕は毎回話しをせずに歌ばっかり歌っていたんだけれども。

2回位、その「仰げば尊し」みたいなのを歌ったことがあるのですね。

それで私にとっては、あの歌は、非常に想いがこもる。

それで、それはともかく、事例として何かありますか、経験。

本来じゃないところに使って成功した。まぁ、ここで古いものの中に新しいものをという。

成功か、失敗かという、それはどうでも良いのですよ。

そういうことを自分で試したことがあるか、ということですね。

僕はHip-hopが大好きなんですけれど、Hip-hopの元々のやり方って、samplingが相当重要な感じなんですけど、そのsamplingって何かというと、昔の黒人は右翼の、楽器も出来ないし貧乏だというので、他の昔の曲を録音して電子音で取り入れてそれをちょん切って変えたり繋げて入れたりして、それを無限に伸ばしたり短くしたりして、そこにlapをしていくというのがもともとのHip-hopの文化だったんです。

僕もその機材を持っていて、昔の曲をapple musicとかで持って来て、それを入れて、slow tempoのやつをup tempoにしたりしてそこに刻んだり色々しているんですけれど。

いかにその古いものを、誰も見たことのないものをarrangeするかによってHip-hopのかっこ良さっていうのは決まる。ふーん。

それでup tempoにしたりslow tempoにしたりちょん切ることで、原型はないようなんですけれど、何かこう残っているようで、そこもLapと同じです。

Lapも変化するし、そこに化学反応が起きる。

かなり今の話しを聞いて、あっ、Hip-hopだと。

Hip-hopだけなんですか、ああいうBreakとかrockじゃなくって、へー、はい。はい。はい。

ちょっと説明して欲しいんだけれど、「そもそもHip-hopとは何ぞや」ということとLapとの関係を。僕はHip-hopとLapの繋がりが見えていないので。

Hip-hopの中の4大要素、Hip-hopという概念の中にLapという表現方法があるのです。

それでHip-hopというのはBreak dance、踊るのとあとgraffitiとか、何か壁に良くこう「しゅっ、しゅっ」と落書きみたいなのも見られますよね。あれもHip-hopなの。

あれもHip-hopの重大なcultureで。へー。

というか、色々とgenreがありますよね。私、breakだと激しいのがbreakかと思った。

逆立ちとか、あとrock danceと、あと何かこういうのあるじゃない。

何だっけ、あれ。Robotというか。

いやいや中に球が入っているような動きをするやつ、あれ何という、何とかとか。

えー、ちょっと分からない。4つか5つぐらいのgenreでやってますよね。

Break danceって、Hip-Hopから出て来た。

ちょっと説明をちゃんとしてくれませんか、僕の中で整理できていないので。

ええと、Americaでは1970年代に、元々はjazzが発祥で。

誰がやり始めたのですか、どういう人が。

黒人の若者たち。

Street danceだから劇場に入れてもらえない人とかrestaurantに入れてもらえない人達でしょうね。お金と楽器を買うお金と、何もないというところでは。

Hip-hopの4大要素はさっき言ったBreakとgraffitiとDJ。

あDJありますね。あとLap。

それがまぁ主にHip-hopで、後sampling。全部繋がってくる。

え、Lapって、samplingから出ているの。そうですね。

Lapっていうのは語るやつをLapって言うんじゃないの。そうですね。

語り。物凄い弾丸のように「何とか何とか何とか何とか」みたいな。

その弾丸みたいに語る時の音楽というのは、昔のやつを使っているということなの。

そうですね、もともとあのbeatというのは昔のjazzとか完成されたものを使っていて。

ちょっとparodyっぽいところがあるよね。そうなの。

そう、だから先生達の世代が聞いたら昔どこかで聞いたというのが絶対にどこかに入っていると思う。

僕は新しく作っているやつにのせているんだと思った。それもあるんです。

でも元々の発祥は、でも最近、加山雄三の「お嫁においで」という曲がめちゃめちゃhitしているんですけれど。へー。

もともとの「お嫁においで」のbeetを伸ばしたり、ちょん切って他の曲を入れたり当に新しいものを入れてmixしちゃうのですけど、もともと古いものを今風に。

そうなんですか。見てみたい。

遊びですけど。へー。

もともとPunk Rockもでもほとんどcoverですよ。

そう。

だってStonesのSteppin Stone。Stonesじゃない、RockiesのSteppin Stone。

だってSex Pistolsとか新しいものだし、私の好きなあの何だっけ、女性のNew York street punkの女王と言われたPATTI SMITHなんか新曲だよ、全部。

でも。

別に古いのを使っていないよ。

いやいやいやいや、いやいや。

あれ、でも、Pistolsは全部「NO」っていう否定形の曲は全部、全部俺たちのものだということでRockiesのcoverを使ったものではない。

「のう」って。「Yes」「No」の「NO」。

I’m not yesterday’s stone.ですよね、Rockiesの。

Coverとかは。うーん。でもpunk rockの中でも元々coverをあり得ないarrangeをするという、物凄く高速で。

それは戸川淳ちゃんの「蛹化の女」はそうだよね。

あれはあのJohann Pachelbelの「Canon」を使ってpunk版「蛹化の女」っていうのを作ったりしている訳でしょう。

だから。

旋律を使ったんですか。歌詞を使ったんですか。

あれには、元々歌詞はありませんから、旋律です。

「たたたた、たたたた、たたた、たたたた、たたたたたたたた、たたたたたたたた、たたたたたたたた、たたたたたたたた、たたたたたたたたたたたたたたたた」それを「月光の白き林で、・・・・・・・・・・・、月光の凍てつく森で樹液をすする私は蛹化の女」戸川純がと歌詞を付けて歌った訳ですね。あれは名曲です。それをpunk版にしたんですね。

そうですよ、punk版に。私はHip-hopって弱いところで余り知らない。

全然知らないのだけれども、若者が私議的な説明を活かせていないですけれども権威に対して反抗し続けた訳で本歌取りを自分たちなりの感性でarrangeしたんですよ。

でも『黒田節』の中に越天楽が入っているとか。

えっ。

『黒田節』って「越天楽」が入っているの、古いところでは。

そうだよ、入っているよ。

入っているというより、「越天楽」を『黒田節』にという。

へぇー。雅楽の旋律ですね。

雅楽の名曲といわれる「越天楽」は唐の玄宗皇帝が作ったと言われている。

唐の玄宗皇帝が作ったやつを、日本では「酒は飲め飲め　飲むならば・・・」を原曲にして反骨脱胎したみたいな。

そういうのは本案とか日本の曲にIrelandの曲の歌詞を変えてやるとか色々とあるんじゃないですか。

まあ、じゃあ、ちょっと専門のことで言うとですね、美術のgenreでは剽窃(ひょうせつ)というのがありますね。

剽窃。「盗む」という意味の剽窃ですね。

まぁ、Hip-hopでも割と、Hip-hopもそれに影響されていると思うんですけれども、あのPicasso、高階先生の『ピカソ: 剽窃の論理』というのがあってですね、VelazquezであるとかRubensであるとか、すごく写実的であるものを落書きみたいに一筆書きで書く訳ですよ。それで、みんな本歌取りであるということは分かる訳ですよね、欧米の人は、教養のある人は。だけど、感性の違いというのが表現されていると思うんですよ。

特に、Picassoはやっぱり若い世代のものっていうのは同じものをやっていても俺たちの時代はこうなんだという。

おそらくその後で出て来るsubcultureの手法の原点はたぶんPicassoとかにあると思うんですよ。うん。たとえばmodern artの中で写実的なものから非写実的な抽象絵画の方に行く時に同じ題材、画題とか出す訳ですよ。『パリスの審判』とかですね。

それをPicassoだったら一筆書きのようにすると顔が化け物みたいになっていたりする。

でもこれが我々の時代なんだと。

我々の時代はこうなんだと。

私から言うとtechnologyが発達して感性というのは変わってきているので、それを表現するには、自分たちの時代の感性というのを表現するには昔のものと同じものをやりながらも違うという差異を見せた方がやりやすい訳ですよ。

全く何もない0でやるよりかは。そういう手法なのかなと思っていて。ちょっとこの世阿弥のやつとは違う。

でも美術史においても音楽史においてもこれは繰り返し現れている現象だということだね。あの新しい若い世代が自分たちのManifestとして使う手法なんじゃないかなという気がしていたんですけれども。うん。

あまり世阿弥のこの本の中にその要素は出て来ていませんけれども。うん。

ただ単に技法上の面白さとして出て来ています。うん。

そういう事例をもうちょっと他に上げるとどういう風なものが歴史的にありますかね。

古いものをrenewalしてという、一種のremakeというか、version upともいえるし、違うversionにして的中みたいなものって。この時もやっぱり、あの、そうすると技術だとrenaissanceとかになりそうですけれども、古代Greeceの本歌取りですから。うん。

同じことをやっていても、分かりやすく言うとBotticelliはVenus of Miloを『ヴィーナスの誕生』で書き換えている訳ですけれど、それまでの骨なし人形のような中世Patrickの絵ではなくてですね、肉感のある女性を描いている訳ですよ。

その基になったのが、古代Greeceの彫刻なんですけれど。

Venus of Miloをmodelにしているの。

Venus of Miloじゃないですけれども、ああいう彫刻はItalyには一杯残っていた訳ですよ。そういうのを基にしているのは確かです。

でも、本当にequalかと言うとequalじゃないんです。

やっぱり後者の方がarrangeが加わっているんですね。

必ず、自分たちの文脈で。

まったく古代Greeceの直接民主制の理想的市民像の肉体美とかではなくって。

むしろキリスト教によって抑圧されていた人間性の回復とかですね、文脈は通底しつつ違うんですね、本歌取りをする時というのは。

まねる方がちょっと多くありませんか、やっぱり、特徴とかも。

そうですね、強調したり、あの、自分の関心のある所を強調して出しているのでやっぱり元の本歌とは違ってくる訳ですよね。deformですね。

と言われると、何か心当たりでも。

物まねをしているコロッケという人が猪木を真似たり、北島三郎を真似たり面白いですよね、何かこう。

能も物まねから来ている訳だから、物まねの問題っていうのは、結構能においては本質的で、モノ学ね、物を真似るという。

その、物まねであって物まねでない、そこに能の場合には幽玄があり、老人の物まねをしても、普通のrealismで老人をせず、優美さを持っている老人をする。腰を曲げたりとかね。軍人もそうで、軍体もそうで。女体はもちろんのこと。

女体は優美ですが、優美な女体の中でも優美さはより強化して抽出する。

そういう意味では、deformerは優美さにtargetが向いているということ。幽玄さ。

だから優美な軍人というのは、ある種、野蛮な軍人であったら普通なんだけれど、優美な軍人というのは禁欲人のようなもの、でも能が必要としているのはそういう戦いや修羅のような中にも、優美さを1点入れ込むというところに珍しい美的な解釈を入れ込む。

能の曲で言うと平家の曲が多くて、平家がどちらかといったら優美なんですわ。源氏の方が割と武骨というか。うん。

そうですね。実際、平家の方が貴族的だったんですね。実際問題。

あの、渡辺昇一と関西大学の面白い名物の文学の教授は誰だっけ。

関西大学で面白い人がいたでしょう、国文学の。

その人がね『謡う平家、殺す源氏』で、平家は謡う、歌ということで謡うと、だから源氏は武骨で、言葉も振る舞いも野暮で、その野暮の骨頂が木曽義仲ということになる訳だけれども、頼朝なんかは多少貴族的なところがありますが、木曽義仲は本当に山男みたいな。

平家で使う能面というのは「中将」とか、顔が白いんです。それで神経質そうな。

源氏で使うのは顔が黒いんです。源氏は馬に乗って戦っているから、日焼けをしているんです。それで平家はどちらかと言ったら家の中にいてそこで琵琶をひいたり歌を詠んだりしているから白い、日焼けをしていない。うんうん。

中西進さん。

違う違う、それは国際日本文化研究センターの方で、関西大学の方ですから。

でも私、このtitle見たことがある、確かに。

「謡う平家、戦う源氏」だったかな。

それで引いてもらったらあるかもしれません。

平家でも、源氏でも、世阿弥では最終的には成仏しているのです。うん。

成仏と言おうか、happy endで終わっているのです。

殺されて、あの世の方でもまた戦いをするのですけれども、死んでも。だけど、最終的には成仏するのです。

何でそういう風に世阿弥が考えたかと言ったら、その当時に応仁の乱というのがあって京都の人口が10万人で、応仁の乱で死んだ人が8万2千人なんですね。

だから、お兄さんとかお姉さんとかお父さんが亡くなっているから、戦いに従事した人が成仏しないでそこで苦しんでいたら困る訳です。うん。

だから世阿弥がそういう風に、たとえばお経を読んだから成仏したとか何か良いことをしたから成仏したとか、最終的には成仏する。Happy endで終わるのです。

応仁の乱は世阿弥の後ですよ。

後ですけれども、まぁ、そういう風にしているのです。

世阿弥は南北朝です。

だから『葵上』でも何というかな、六条御息所が、普通は葵上を殺してしまうのですけれども、だけれども殺さないで、また再び生きなさいよと話しを変えている訳です。

能の構造というと観客が抵抗感のあるend=落ちは駄目ということですよね。基本的にはね。ああ。

ただその世阿弥の子どもの十郎元雅というのは悲劇的な『隅田川』とか、結構悲劇の曲を作っていて、本人も悲劇的に亡くなっていると。

だからこそ嫌われているんじゃないのかな。あんな風に突き詰めたところまでいっちゃったから。あっそうだ、『謡う平家、殺す源氏』。

日本人が併せ持つ心の原点を探すという谷沢永一という人物だ。

谷沢永一関西大学教授と渡部昇一上智大学教授の対談です。

『謡う平家、殺す源氏』これが１つの。

渡部昇一さんとの対談だったんですね。谷沢永一。

まぁともかく古いものと新しいものとの関係というのは、古いものは、古典は甦る力を持っていますよね。常に、それだけの基本骨格に。

でもその古典を大事に出来ない人間は新しいものだけで勝負をしてもいずれ、何と言うのか、頭落ちになっちゃう。

まぁ、日本で古典と言えば、私は、代表する古典は『古今和歌集』だと思うんですよね。1番の古典は。『古今和歌集』の中に今の「君が代」は入っている。

まぁ、その歌はね。ああ、そうなんですか。詠み人知らずで入っていますよね。

あっ、そうなんですか。うん。

『古今和歌集』が骨格を成して、『万葉集』ではないんですね。

『古事記』でももちろんない。だから『古今和歌集』が持つ、日本文化における基盤というか、何と言うか変形stereotypeみたいなものが凄く大事で力がある。

それでそれを作ったのは、紀貫之ですよ。

それで能をやったのは紀友則とかなんとかだったかな。

友則じゃない。権守じゃないですか。恒忠だったか。

紀一族というのは、非常に、こういう芸能や学芸に関する重要な伝統を持っていると同時に新しいことを仕掛けていきましたよね。紀貫之が革命的であったのは、あの、その『古今和歌集』を作ると同時に、編纂すると同時に、『土佐日記』を書いたことですよね。

その女性が、まぁ、女のふりをした訳ですよね。

女のふりをして「ひらがな」で日記を書いた。

それで女性たちがずっと日記を書く文化が一般化していく。

それを「男もすなる日記なるものを」、それまではたとえば道長とか道長はもっと後の人だけれど、皆、日記は漢文で記していたもので。

それを日記の中に歌を、問題はですね、『土佐日記』って歌日記だから一番大事なのは歌なんですよ。和歌。だから和歌を記したということがとても重要なことで、それを『古今和歌集』と『土佐日記』というのは歌を「ぱしっ」と出している。

まぁ、Lapですよね。いや、本当に。あの人なんかは、本当にavant-gardeですよ。

紀貫之は完璧にavant-gardeで、今のcosplayのね、元祖cosplayみたいなものだし、当時は皆洋風にしていた訳ですよ。中国風にね。

その洋風の中で和風に自分がcosplayをやって見せるのだから、かなりfunkyですよね。

まぁ、そういうHip-hopの中の権威みたいなものをこう突き崩して自分たちの面白い世界を作り上げたとするならば、貫之さんはそういうHip-hop的じゃないですか。

歌合せとかも。

歌合せもかなりHip-hop的だっていう。うーん。

歌合せもHip-hopも最初にできた文化でして即興で言葉尻とか韻とかを踏まえてその文脈に則ってanswerとか返さないといけないのですよ。

返す時にも頭の中で頭をfull回転させて昔の本歌取りとかをその場でつっこんで。

へー、そこまで。そこbyteとかじゃなくって。そうですね。

観客も教養があったら、理解できるので。そこまで私分からない。

今度ね、私の詩集の中にもHip-hopが1つありましてね。あ、そうなんですか。

意外な展開。

それはですね、どういうところかというと、かつて『歌と宗教　歌うこと。そしして祈ること』という本の中に載せたやつをここの中に載せたんですよね。

それは「佐藤西行vs鎌田東行歌合戦」っていうやつですよね。

それで6番歌合せを、ここの入っているやつをここに載せたんですよ。この中にですね、この歌合せというのは全部で10番の歌合せがあると思うんだけれど、6番。

それはですね、あのちょっと聞いてみて下さい。この歌合せを。

どっちがimpactがあるかどうかはそれぞれが判定してもらって、西行に東行がね、東行というのは私の事で、鎌田東行と佐藤西行。世阿弥研究会はこういうのり。

そうですね、まず、1番ね、西行。

「吉野山 こぞのしをりの 道かへて まだ見ぬかたの 花をたづねむ」

これが西行ね。

東行。「花祭り 鬼さえ鬼と 知らずとて まだ見ぬ君の 天の乳房か」

どうでしょうか。西行、東行。

それで2番目。2首目。

「年たけて またこゆべしと 思ひきや 命なりけり 小夜の中山」

有名なやつですよね。

東行「いのちはてて 超えてゆくらむ 奥山を 照らせ今宵の 不死の新月」

西行「心なき身にもあはれは知られけり 鴫立つ沢の秋の夕暮れ」

これも非常に有名な「三夕（さんせき）の歌」。

東行「身も心も 尽き果ててなお 秋の気配ぞ 立ち惑いける」。

西行「仏には 桜の花を 奉れ わが後の世に人弔わば」。

東行「仏には仏の道の巡り花 神には神の魂寄りの歌」。

西行、これも有名な。まぁ最も有名な一つ。

「願はくは花の下にて春死なん そのきさらぎの望月のころ」。

東行「願うても願うてもうち砕かれて 木端微塵の流星の人よ」。

それで最後6番目。

西行「身を捨つる人はまことに捨つるかは 捨てぬ人こそ捨つるなりけれ」。

東行「捨つるべき 何ごとのあるや花時雨 道なき道に 拾う神あり」。

という対抗歌合せをこうやった訳ですね。

これは遊びですけれど、ちょっとHip-hop的じゃあないですか。

うん、Hip-hopですね。Hip-hopですけれど、美しいですね。

Hip-hopってやっぱりやりやいというか、罵るんですね。ああ、そうなの。

「ディスる」。「ディスる」んですよね。

上手く言うと論破するとか、どっちかっていうとdebateなんですよね。

でもこれも戦っているんだよ。対抗しているんですよね。

あの「ディスる」ところもあるんだよ。

私なりには、西行を「ばん」と打ち破ろうとしている。ああ。ああ。

たとえば、西行は美しくですね「小夜の中山」みたいなものは「照らせ今宵の不死の満月」みたいなものは、「不死」、死なない新月というのはちょっとやっぱりこう、死というのは真っ暗じゃないですか。真っ暗って「死ぬ」訳じゃないですか。

死ぬと新月が結び付くんだけど、不死の新月ということによって、命っていう風なものをその小夜の中山でこうずっと通過している西行に対して、もっとblack humorみたいなねところに持って行こうとしているのが私の対抗歌なんだけれどね。

まぁ、そこまで読んでくれる人はいないんだけれど。自分で。

でも、judge側に教養がないといけない。Judgeは教養が要るんですよ、実に。

そうでないと、私も教養があるから西行をこういう風に取り込んでいるので、その教養とですね、反骨みたいな。

西行、何者ぞ、みたいな。それがあるから、こういうのを敢えて、歴史を超えて詩のboxingをやっているようなものですよね。

でもそういうことをすることによって、西行にもう一回命を吹き込んでいるんですよ。

ああ。西行を私はrespectしているから、その西行に対するrespectが、こういう形でね。

つまり古きものが、西行は古きものじゃないですか。

私の新しいそれを「どん」とぶつけることによって西行に命をもう一回与えるという。

そういうようなことをね、狙っている訳。

学問としては今の解説で完璧で一言も付け加えることはないですけれども、詩人としての鎌田先生の事を考えるとですね、そうですね、私評論家くせがございますので、全部の詩や物語がworlds endですね。なんかいつも死の影というのかあの世とこの世の境目にいるなというのが私の率直な見解です。今度はもろそれなんだよ。そうですよね。

「常世の時軸」というのは常世の国に行って、多遲麻毛理が垂仁天皇に命じられて、常世の国に行って常世の国の時軸を持って帰ってきたら天皇が死んでいたみたいな話なんですよね。それが橘で永遠の生命を蓬莱の国の永遠の生命、不死の不老長寿の薬みたいなものですよ。それがみかんのおこりなんですが、私はそういう風なものを取りに行って、見出せないという世界を描いていった。

だから、結局、それは手に掴むことができないという常世の時軸というのはその多遲麻毛理の世界を現代においてparodyのように、そういう不老長寿みたいなものの世界は、あの、どんな風にしても行き着かないみたいな不老長寿を求めるんじゃないのだけれども、死と生のedgeの中にあって、どんな風に死生観を構築しようとしても、そのこぼれているみたいな、それは虚しいみたいな。

まぁ、それによって救済されるというようには簡単にいかないみたいなことを書いている。そこが西行さんはそこを書いていないから、今ので見ると、私なんかは鎌田さん寄りでものを見てしまうんですね。

西行さんはもっと世俗的な感じがする。そうでもないですか。いやそうでもない。

西行は非常に道家的、求道者的ですよ。うーん。

でも鎌田先生ほど、この世の果てを見に行っていないような気がする。

私は、根っからの欲望は「この世の果てを見たい」みたいなものだから、この世の果ては一種宇宙の最果てで、宇宙の終わりみたいな。

そこを西行さんよりも分かるとすれば客観的に見るとやっぱり寺山修司さんだったんだろうなと思うんですよね。寺山先生もそうでしょう。おそらく。

そうかもしれないね。

一貫して、表現をしたいのは母というのを別にすればそうなる。

そうですよ、寺山修司さん、見出されているんですよ。

彼は詩人ですよ。

だから寺山修司が私の詩を見出したんでしょう。

その時は先生がどのくらいの時ですか。

高校生の時ね。へー。それはともかく。

それはともかくって、感動していないんですか。

あの、終末論なんですよね。そこにあるのは。

だから色濃くあるのは、世紀末というのか、終末論があるのは。

ありますよね。寺山修司にもあるよね。はい。

この世の終わりみたいな。私の中にも結構ある。

僕はMadrollの歌が好きなのは、そういうどうしようもない終末的な、終末的という言い方を別に言い換えると黙示録的ということになる。黙示録というのは世の始まりであり、世の終わりじゃないですか。

だから新しい世界の始まりであり、今の世界は滅びるということになるんだけど、この滅びと始まりとが同期的にせめぎ合っている訳よね、「黙示録」の世界では。

私がずっと惹かれているのは、そういう意味では黙示録的な風景なのかな、と。

だから破局と破壊と新しい芽吹きみたいな。

「風の谷のナウシカ」が好きなのもその辺かもしれないし、「もののけ姫」も割と惹かれるのはその辺があり、かつ、「2001年宇宙の旅」が好きなのも、破局と再生みたいな、まぁ簡単にいうと「死と再生」の物語です。

神道songはまだあれ笑いが入っているので、あの、聞き流せていますけれど、たぶん文字面だけで先生の詩を見たら暗ーい世界じゃあなかろうかと考えている訳ですよ。

だからそのね、これまで書いた中で一番暗い世界になるのかなーと。

でももっと暗いものを本当は書きたいのですよ。そうですよね。

先生の、時よりあの有名な話しに「脳を蹴飛ばす」とあるでしょ、えっ大丈夫というくらいに暗いですけれど。

詩集というのを聞いてですね、えっ、鎌田先生の感受性から笑いの音楽性を抜いて文字面だけで見たらすっごく暗い世界じゃないのかと。

だから誰が買って読んでくれるかな、と心配になって。ははは。

暗い人が読む。

それでいくのか、そこは鎌田先生がbalanceを取られて何か、こう明るい「陰・陽」の「陽」の要素を入れているのかっていうのが最終的に聞いてみたかったのです。

だからね、陽の要素がちょこっと入っていたんだよ、最初は。

でもそれを最終的に今日ね、ばっさり削ったの。

だからもう「陽」の部分がもう殆どなくなっていて、救いようのない世界になった。ははは。もう、完全に「陰陰・滅滅」の世界ですよ。ああ。

でも先生、私が思うのに、完全な陰の世界、暗闇の世界で初めて明るさ、陽の世界を感じる人もいると思うんです。

そこまで読んでくれる人がいたら、私のこの本を出す意味はあるんだよね。

これを鶴岡賀雄さん『十字架のヨハネ』のね研究をした人に書評をしてもらいたい訳。

それで、頼んで、まぁ引き受けてくれている訳。

その鶴岡賀雄さんという東大の教授、まぁ、名誉教授ですが、その鶴岡さんが私の『水神傳説』という今から34年前に出した最初の本を書評してくれたんですよ。

「心霊研究」という雑誌で。

それが彼がこう最初に活字になって原稿料をもらった最初のね、ものだったらしくて。

へー。

それで今度、私が34年ぶりにもっと、あれは物語世界だから、物語なんですよ。

でも今度は物語ではなくて、もっと死そのものに、まぁ私が考える死の世界なんですが、それを前面に出したので、どういう風に鶴岡賀雄がね34年後の鎌田東二の世界というものをどう読むかと非常に楽しみにしているんですよ。

東大の宗教学の人。

今年から南山大学の特別研究員みたいな仕事をしている、まぁ、キリスト教者。

高野山でしょ、南山って。

南山大学は名古屋のですね、Catholicの大学。東大の神秘主義。

東大の宗教学はでも何というのかな、新霊性運動に対する新派の集まりのような場所に僕なんかは見えるんですけれど。

京大はね新霊性運動に対して批判的だね。旧霊性運動だから。

西田幾太郎だからね。うーん。

だからnew ageは嫌いなんですよ。意外に東大の。

『リング』の貞子とか。えっ。

あれでしょ、福来友吉でしょ。ああ、そうです。

福来友吉はあそこの心理学の助教授だって、辞めさせられたんですよ。あっ、そうなんですか。あの貞子のモデルですね。

両方から撮るのは念書。そうそう、そうそう。

念写とかね、透視とかね、千里眼とかやっていた。

能のね、鏡の間というのも凄い空間なんですよ。装束を着けて。

恐いですよね。写るのがあの世なんです。それでこっちはこの世に居てて。

それで死んだら、この着物を逆にするでしょう。それも逆になっていて。

そして、それをずっと見続けて、仮面を付けている時にあの世の人になるんです。

それで幕が開いたら、幕は西側だからあの世からこの世を見るのです。

それであの世に行ってこの世を見ながら舞って、また鏡に映して面を外したところでこの世の人になるという、そういう風に、できているのです。

ちょっと河村さんにお願いがあるのだけれども。はい。

河村さんに今度の詩集をですね、能にして欲しいんですよ。

おっ。

『常世の時軸』というtitleなんですよ。はい。

それで『常世の時軸』というtitleでこの中にまぁ、約40点くらいの詩があるんだけれど、その中のどれでも良いから繋いで、謡いにして、適当に謡いにして河村流の1曲の能に、音楽に関しては私が適当に河村さんがこんな風なのでやってくれって言ったら付けてみますから。それをちょっとやってほしいなと。一番暗いのにしましょう。

でもさっきアルタンジョラーさんも言われていたんですけれども実は、今の河村先生の話しとも繋がるんですが、僕は、はっきりというか客観的に鎌田先生の詩という字面的にいうと物凄く暗いしsevereなんですけれど、それが崩れない、前に言ったかもしれませんけれど崩れたり、壊れたりしないのは実はそれは強靭なこころの強さに支えられているものだと私は思っているんですよね。

鎌田先生は、時々気持ち悪いこととかですね、怖いこともされるんですけれど、それはあのいつも、狂人と紙一重だなという感覚がある訳ですよ、私の中ではですね。

だけど、狂人と鎌田先生のようなもしくは寺山修司さんのようなもの、あの、artistとのはっきりとした違いはやっぱりこころの強さですね。明らかに、本当にそのまま狂っていくようなのだったらそれを芸術として出せないですよね。

河村先生もそうですけれども、たぶんちょっと危ない気持ちになったりする。

ちょっと何か下りて来て、戻って来られない感覚というのもmentalか何か参っている時とかにあるんじゃないのかと私なんか思うんですけれども。

でも、能楽師は基本的にShamanだと思うんですよ。

あの、でも現実世界に戻って来られるのはどこかで強いという気持ちというのか芯が通っていないと。

私が最近思うのはね、あの世が本当でこの世が仮の姿かな、と。

私はいつもそんな感じですよ。

どこかに居ていて、この世はちょっと遊びに来ているとかね。

そしてまたあの世に戻って、魂は永遠に生き続けていると。

まぁ、三島由紀夫の『仮面の告白』もそういう世界に近いと思うんだよね。

それはあの、非常に健全な見方だと思って。

それがとれないと、現実と幻想との境界が曖昧になって、ずれていくんじゃないのかと。戻って来られなくなるんじゃないのかと。

だからあの、暗いと先ほど申し上げましたけれども、暗くないと思っている。

鎌田先生の詩集。

でね、そういう自分の事を言っても余り詮無い、作品が勝負だから詮無いことなんだけれど。私は無神論者じゃないんですよ。

本当に根っからのspiritualistで、祈りという風なものも信じているというか、絶対に力を持っていると思っている人間なんですが、詩の世界、詩で語っている世界はその裏みたいなものなんですよ。

そういう風なものも途絶えてしまうみたいなことが表現されているんですね。

だから字面で見ると、救いはないんですよ。

でも字面の底に何があるかというと、私の祈りがそこにあるんですね。それを支えている自分のもちろん自我もそれから何かもある。

しかし自分でも分からないんですよね。何でこんな風なのを書いちゃうか。

これは殆どもう神懸り状態で書いているものだから、書きたいと思って、書こうと思って書いている訳ではないんです。別段。

でもそういう風にしてこう出て来ているものは。自動書記的ですね。

まぁあるものは、酒鬼薔薇聖斗になりかわって書いたんですよ。

だから酒鬼薔薇聖斗の世界がこう半分くらい入っているのですよ。ああ。

自分にとってですよ。

そうか、敢えて言うまいと思っていたんですけれども、さっきまで、鎌田先生が言われるなら言いましょう。でも鎌田先生の本を読むと酒鬼薔薇に手紙を書いてますよね。

あの、私なりに解釈すればその感覚はおかしくないと、君はおかしくないとmessageとしては送っているように見えるんですけれど、私から言うと酒鬼薔薇と鎌田先生は決定的に何か違うんですよ。

ということを言うとややこしくなるので言うのをやめようと思っていたんですけれども、

僕自身の中でもまとまっていないんですね。あの後も、彼が色々と三十何歳ですか。

三十五歳です。書きましたよね、色々と。うん、書いてる。

『絶歌』でしょ。私も読んだんだよ。全然反省をしてないですよね。がっかりしたんだよね。全然反省をしていない。何をがっかりしたのかというと、その水準にね、私が望んでいた水準ではなかったということ。うん、ないですね。

鎌田先生の方が遥かに深いので、深いというか奥まで行っているので、私は酒鬼薔薇からの最初の死にしろですね、確かに本質的に現実の方から抜け出ているんですけれど、浅いんですよ。だから鎌田先生が手紙を出すほどでもないんだけどな、というのが私のあれを見た時の。年齢的に12歳、14歳でしたかね。うん、14歳、15歳。

あなたは酒鬼薔薇だけを見ているからなんですよ。ああそうか。

私はその酒鬼薔薇聖斗の親と同じ年代で、私の子どもが前も何度も言っているように酒鬼薔薇と同じ世代で、そしてあの事件があってPTAの会長をしていた時に起こったから、余計に交差している訳で、焦点が「がちっ」とこう来た訳で。それでただ、ただの事件ではなかったんです、私にとって。

オウム事件もそうだったけれど、あの事件を通して象徴的に日本のこの精神世界というのかまぁ、ある種、霊も含めてですが、精神世界のblack box、pandoraの箱みたいなものが「ばしゃー」っとこう、一挙にこう開いたみたいに。それをどうするのということがあるのですよ。その結末の流れの一つが私にとって自殺=魔境論を書くっていうことは1つ思想的な意味で1つの仕事なんだけれど、もう1つの仕事がこれなんですよね。

「自殺」「魔境」みたいな思想で考えるのではなくて、感覚そのものでそれをどういう風に示すのか、みたいな。だから、私にとってはね真剣勝負なんだよね、今回。

かなぐり捨てているので。ふふふふふ。まぁ、ちょっと語りが熱を籠り過ぎました。

まぁ、じゃあ、最後にもう1つだけ、今のところ、これを見ていて1つ思い当たったのは、立花隆さん。『立花隆先生、かなりヘンですよ : 「教養のない東大生」からの挑戦状』という本がありましたよね。ありましたよね、あれは誰だっけ。

あの、東大の学生が「間違っていますよ。」みたいなことを言う。

あの、つまり昔は共産党に対するとか、誰だったっけ田中角栄さんとかやっていた時には物凄いやっていたんだけれど、今はもうnew ageの新派になってインチキばかり書いていて、ちょっと昔みたいに真剣にやって下さいみたいにいう揚足取りの本だったんですけれども、そこの何だったのかな、簡単なことは略式ばかりをやっていると浅くなってくるという構造的にはそういうような、まぁまぁ彼の目から見たらそういう風に見えたんだろうなということ。それをちょっと言い損ねていたので。

ああ、それをまた自分の事に引き付けて言わせてもらうとね、神道songばかり歌っているとね、略式になってね、浅くなるという面もあるんですよ。

というのはこれは、message songだからね。

神道songというのは、子どもたちに向けてから始まった。

酒鬼薔薇聖斗の世代にどういう風に親として向き合うことができるのか、みたいなところから始まっているのですよ。だから、大乗仏教みたいな世界なんですよ。

でもその大乗仏教の世界というのは救済を説く訳だけれどもね、神道songも救済みたいなものを説くのだけれども、でも実際にあるものはもっとこう複雑で簡単にはいかない訳ですよ。小乗もあれば密教もあるみたいな。小乗であり密教であるみたいな世界を「ばん」とこう出さなきゃいけない。ある種、こう、突き詰めた究極の世界。

それが、今回は私にとって略式ではなくてここでいう心読ですね。あの転読ではなくって。

あの神道songは転読なんですよ。ある意味で。

それを転読することによって、でも、何か1凜を感じ取ってもらって皆が生きる元気を見出してくれたら良いんだけれど。励ましみたいなので良いのですが、癒しとか。全然OKなんだけれども、でも実態はもっと深刻なんですよ。

生きるということの持っている闇みたいなものは深い。そういう深刻な闇みたいなものに自分がどこまでどっぷりと入っているかみたいなものを、そして、そこからそこで立ち止まらずにいられるかみたいなものを勝負しないといけないという。

まぁ、ある意味で私にとっては密教ですが、それが。

そういう密教の部分を今回の詩集に込めたみたいな。

それで言うとですね、勝又邦彦さんと対談をしたんですよ。いつ頃。

えっ、先週の土曜日。つい先週だったんです。

合宿の初日だったんです、私。だから私行けないなと思って。

勝又さんから連絡が来ていたのだけれど、私はいけないなと思って。

どこで。MEDIA SHOPという三条にgalleryがあって、そこで彼が新しく写真集を出したあれで、東京と大阪と京都で連続対談みたいな、京都は私を対談相手に選んでいただいたのですが。うん。

あの、その打ち上げでですね「この前、performanceしたんだよ」って言うんですよ。

誰が。勝又先生が。だって、勝又先生は完全に職人肌で、もともと画家になりたくて鎌田先生に言って画家を紹介して頂いてというところから写真家になった人ですが、あまり肉体性というのはないですよね、作品に。この前からPerformanceしてるって言うんですよ。

しかもちょっと、自分の名前をstraightに出すのもあれだったので、変名なんだけどねと言って。ふーん。

どうしたんですか勝又さん。どんな心境の変化ですかと言ったら勝又さんが「いや、鎌田先生が神道songとかやるじゃない。あれにちょっと触発されて。」と。ははは。みたいな。

どういうことをやったの。

自分もやらなきゃいけないんじゃないか、やっても良いんじゃないかって気持ちになって来たんだ、最近、みたいなことを言っていて。ははは。

あの、結構ね、私の神道songはね、何人かに影響を与えているよ。

触発するものがあるんですね。

それは、あの、かなぐり捨ててやっても良いのだということで、私はそれも能の世阿弥の精神だと思っているんですよ。つまり、今までにない、結局、組み合わせなんだよね。

あの、世阿弥も全部originalityを作った訳じゃない。殆ど右から左からの借りものなんですよ。

世阿弥のoriginalityがあったとすれば、それをやっぱりまとめて体現化してそれに芯を入れたということなんですよね。

その芯を入れるというところが世阿弥の素晴らしいところだし、形式としては複式夢幻能にまとまっているのだけれども、それは見事なものがあるんです。でもその、素材はその時代にもう全部出揃っているんですよ。

そういうようなことを、どこまで命懸けでやるかの問題だよね。

それで先生その大乗仏教的な神道song、お子さんが中学生の時の神道song、それ以前の神道songってもうちょっとロマン派ですよね。

それ以前にはないんですよ。神道songは。

あれ、神道songじゃないんですか。

あれは私の言ってみれば、Novalisですよね。

先生、私はあっちの方が結構良いなって、danceになるなっていう感じだったの。神道songでは踊れないけれど、Novalisの『青い花』とか。

神道songは大乗仏教だから、ちょっとやっぱりこう、昔の共産党の民生みたいに、そういうことをチャラいというか。

血の海がどうのこうのと朗読が入るところが、結構私は良いなと、正直思ったんですけれど。何ですか、それ。自分で作ったんじゃないんですか。そういうのは色々とあるんですよ。

ちょっと青いなと思いながらも。青いんですよ、私は。今でも青いんですよ。

青春だな、青春だな、と。青じゃなく緑なんですよ。ははは。

青いも緑も同じ。葵祭っていうのは、緑の祭りですから。

ねぇ、葵祭。葵祭は緑の葉っぱが一杯です。はい、すいません。盛り上がり過ぎた。

では次をお願いします。

**三、「上手之知レ 感事」(上手の感を知ること)　「210頁15行目～212頁11行目」**

ここのところは、非常に重要なところで、「上手の感を知ること」。まぁ、奥儀の奥儀ですね。奥技の奥儀というのはまぁ、免許皆伝のその先に何があるかみたいな。

ここで大きくは2つに分かれて「上手」と「達者」の違いを述べている。

その「上手」も名人の位からさらに名人を超えたところまでどうやって行けるのか。

じゃあ「上手」と「達者」の違いっていうのは、心にある。

達者っていうのは技であり、でも、舞いや動作など二曲三体もですね、技なんですがその技を生み出す心の状態の極まりっていうものが開けがないと、どんなに技が上手、達者であっても達者のlevelになる。

だからその達者のlevelから、上手とか名人という位には至らない。

心にてする能、面白さとかそういう風なものを感得して心にてする能はいわゆる技が達者でなくとも人に何かを与える。

それでそういうような上手の位になってもさらに「面白い」という感覚にまで行き着くかどうかは上手であってもさらに「面白い」というのはちょっと違う。

その「面白い」という所まで行かないと名人にはならないのだけれど、「面白い」を超える「面白さ」ですね。「面白い」を超える何かが無ければいけない。

普通にいう面白いというのは、技のlevelとか前後の関係の新鮮さとかそういう風なことになるのだけれども、「あっ」という感動というのか「驚き」というのか、「あっ」と思う何か。それはもう言葉では説明できない「あっ」という、それは言葉では説明できない純粋なもので、混ぜることができない純粋なもので、だからそれは「感」という字から「心」を無くした感動の「感」がこころを無くした状態で「あっ」というものを生み出すような、それが今、極みみたいなものである。

上手の上に面白さがあれば名人だけれど、その上に、その面白さも超えて、無心の心もないけれども無心で、こころもないけれど「あっ」という感覚があるというのがこれが最高の名人の上の名人みたいなものであるという、この辺がその奥儀なので、この奥儀の極まりのなさをよくよく招致すべきである。まぁ、凄いことをここでは語っている訳ですね。

今まで、芸論だったものが一気に形而上学みたいなところへいっているので、まぁ、能の神学はこの辺にあるのですね。

河村さんなら、実践者としてこれをどう読みますか。

技術ということもあるし、そのこころということもあるのですけれども、舞台の時には基本的に全部頑張っているのですけれども、意図的にしていない時、たとえば物凄く体調が悪い時に、良い能が舞えたりすることがあるのです。

それは、無意識というか、普通は考えてここはこういう風にしようここはこういう風にしようと「見え見え」と言おうかなんだけれども、体調が悪かったり何かの時にはそういう意識が無くなってしまっているからかえって、良かったなということがあったりするのです。

無意識の能とでもいおうか。

あの工夫をしたりだとか、こうしようという演出を考えているlevelだと「面白さ」は醸し出されても、ここで言う無心の状態には至りませんよね。はい。

だから無心の状態というのは、40度近い熱が出て、フラフラでしかし何かしなければいけないみたいな今日は駄目だみたいに思っている時に「火事場のバカ力」ではないけれども、何か「フワッ」と何かが乗り移ったかのように急に「すぽっ」と入っちゃうみたいなことがね。起こるかもしれませんね。それはもう、起こるか起こらないかも分からないけれど。

あの、河村さんは、そんな経験はあります。そうですね。

思いがけない何か。

僕は一番、僕が舞った中で一番良いなというのはあの、一回目の『道成寺』が良かったのですわ。一回目の『道成寺』。

九郎右衛門先生と幽雪先生と申し合わせが終わってから、もう1回稽古をしてもらったのですけれどもね。

殆ど「無心」でしたね。それで1度、河村隆司という人に言われて、後シテを頑張りなさい。後シテというのはあの鐘に入ってから。

前シテはね、みんな頑張るんです。それで鐘に入って、ほっとして、後は何か線が抜けたかのような落ちばかりだと。うん。

前は誰でも頑張ると、それで鐘に入ってほっとして「ああ、いけたな、もう大丈夫だな。」と思ってからきっちりとするということだけが意識にあったのです。

それは先生、この前にも『道成寺』をやられましたよね。

やりましたね。あれは2回目なんです。

あれは頭が赤い。普通は頭が赤ではないのですけれども。

私、2週前にこれを読んでいる時に言っているかもしれませんけれども、pitcherのperfect gameとかはだいたい二日酔いとかですね、徹夜明けとかが多いそうなんです。本当に。

最高のperformanceを発揮するのが。余計な邪念がないというのか左脳に邪魔されていないというのか。実は私、あの3日ほど前の授業は自己bestの授業だったんですよ。

だいたい授業が終わった後は真っ白な灰になって燃え尽きているんですけれども、先週の授業ではするつもりもなかった徹夜をしていて、一睡もしていないでですね、しかも今年は3年目なんですね。1年目はもうがむしゃらにやっている。

それで2年目には、ある程度まとまってきたのだけれども、3年目から見るとまだまだちょっと粗があるということですね。やっている内に3年目こそは完璧なものをみたいにしてやっている訳ですね。24時になったら寝ようと思っていたのに夜が明けてしまったと、寝る暇がなくなって、このまま行こうと思っているんですけれども、それでも時間が足らなくて、時間内に収まるかどうかが分かっていないんですよ。

あの、体感では何となくこれはイケるんじゃないのかと思うのだけれど、これoverしているよなという量をやって、やっている時には半分無心みたいになって、余計なことを考える暇もないようなくらいでですねやっているんですけれど、ばっちし時間内に終わったんですよ。完璧だと自分で思って、これはイケてると思って。

反応はどうかと言うと、割と良かったのですよ。失敗かなと、思ったんですけれども。

僕は授業の前に何度も読み合わせを一人でやってですね、時間を完璧に測ってやるというようなことをやっているんですけれど、今回はそれをやっていなかったので「一発勝負だ」「外してもしょうがない」みたいにしていったのですけれども、上手くいった。

やっぱりですね、徹夜で無心の方が良いのかなというような。冗談なんですけれど。

そういう方法論ではちょっと危ないので成り立たないのですけれども。

君の場合には、割と準備して準備して準備してという完璧主義者だからね。

準備が9割だと思っていますから。

というのは全部が逆なんですよ。

昔は、ちょっと鼻持ちならない10代でですね。

自分はsenseとideaだけはあると思っていた訳ですよ。

だから美術大学なんていく訳ですけれども。

逆に言うと、技術が全くない訳ですね。

そういう中で、Lapじゃないけれど、Liveはノリだけsenseだけみたいなのでやっている訳ですよ、それで何とかなっちゃうつもりだったのだけれども、どっかで壁にぶち当たる訳ですよ。

本当に才能があってtrainingをしている、芸術的にも技術的にもtrainingしている人間には敵わない訳ですよね、senseだけでは。うん。

いやsenseだけでも、上手も名人も超えるのはsenseというのが花を出すというたぶんそれだけを追求していた10代の頃。でもそれでは駄目だというのかですね、色々失敗を重ねてですね、才能もあってtrainingをしている人を見るとですね、ああ駄目だこっちではないというのがあってですね、その反動で、今も準備が9割なんですよ。うん。

Ad-libというのは基本的に信じていない。だけど、だいたいad-libになりますけれどね、最後はね。

そのad-libに行く前にどれだけの準備を重ねられるかという。ややあの何というのですか、病的なmanagementというのか5回1人で読み合わせをやっていけたら俺はイケるみたいな感じで暗示を掛けてですね、いるんですけれども決してそれが完璧に出来たからと言って上手くなる訳ではなくてどこかそこを飛躍した時の方が良いような気がしますよね。

何か飛躍ですよね。ただ、準備は大切だということで。

私はちょっと違うかもしれませんけれど、ballerinaの森下洋子さん。あの人はどうしてballerinaで名前が残ったのかというと、身体が恵まれていないからだと思うんですよね。

とても上手な人たちというのは沢山いるんですけれども、美人で綺麗で振りが上手でという人は全部corps de balletのお姉さんになっちゃって、森下洋子がなぜprima ballerinaになったのかというと足が短いんですよ。

だから他の人の履くtoe shoesの2倍のみんなアヒルみたいなtoe shoesの下が長いのを自分で作るんですよ。そこから認められるというか、皆がゾッとする足のtoe shoesを自分で作っちゃうというか。

それを見た瞬間に皆が上手という以上に感動しちゃうというか。しかも動きが見事というのか、もっとpointeが難しいんですよね。Balanceを取るのが。

だからnice controlの美しさというのが普通のballerinaより完璧に出て来る。

一点になるのが難しいtoe shoesを作ったんですよね。でもそれで他の人より足が長く見えるし、綺麗に見えるし。何かちょっと飛躍って言ったので、もう文字通り自分で改善しちゃったというか道具を。余り条件が整い過ぎたら駄目なんですよね。誰だってそうなりますよね。欠点みたいなのがある方が良くて。うーん。

この前ですね、私は今まで基礎練と耳と指との関係とも言えるのだけれども、日々基礎練をしていないと絶対に駄目なんですよ。それはもう間違いなくて。毎日、笛を吹くので良く分かります。毎日、毎日同じようなことをやっていないと駄目で。

いつも思うんですね。

それも毎日、毎日、生半可にやっているとやっぱり駄目なんだけれど、それが自分も忙しいから生半可になっちゃう訳よ。でもそれが何十年もやっていると、その本当に積み重ねなので、それがないと現場で臨機応変みたいなことも絶対に生まれない。

これはもう、本当に身に染みて分かるんですね。

この前ね、福武れい子さんという瀬戸内の直島artをやっているところを福武總一郎さんの奥さんに案内をされて、島薗進さんと私が案内をされて行ったんですよ。身心変容技法で報告をしたやつ。

そこでですね、私が直島、犬島、江島という3つの島があって、いくつかそこの博物館で法螺貝を吹いたのですが、その時に一番ですね自分の中でちょっと異変が起こったのですが、三島由紀夫の『仮面の告白』を書いた家を福武総一郎さんがそれを持っていて、渋谷区松濤で買ったらしくってそれを持っていて、それを解体して犬島の「ヒーロー乾電池」という柳幸典という人が作った美術館にそれを展示しているんですよ。その三島の世界を『仮面の告白』を含めて作った家の部品をばらけさせて、そこでInstagramのように空間展示をしている。

そこで「私は三島由紀夫の鎮魂のために笛を吹きます。」みたいに言って。福武れい子さんとか島薗進さんとかがいて。

そこで、まず岩笛を吹いて私の3つの神器を共に吹くつもりはなかったのだけれども、岩笛を吹いて余りに入り込み過ぎたものだから、横笛を吹いてまたすごく思いがけないくらいに入り込んで、最後に法螺貝を吹いて法螺貝も「がーっ」といって3つ揃って今までこれほど会心のね、演奏というか調和が出来たことはない。まぁ、その空間も、結構良かったのです。そして、「ああ、凄いのが自分でも出来たな。」みたいに思って。

そして「横笛の時が一番良かったな。」、みたいに自分の中で余韻が残って。

そして直島に戻って、あそこには崇徳上皇のお宮があるんです。

それで崇徳上皇のお宮に寄って、私は崇徳上皇に因縁があるからどうしても西行さんが詣でたように鎌田東行も詣でなきゃいけない。それでやったんですよ。

そうしたらですね、笛を吹いたらね、一切音が出なかったんですよ。本当に音が全く出なかった。その前の三島由紀夫の時には、あんなに良い音が出ていたのに。

私は瞬時に、これは崇徳上皇の怨霊かなと思ったぐらいでした。

それでどういう風にしても音が出ない。まぁ、音が出ない原因は色々とあったんですが、その音が出ない状況になって、この時のこう落差みたいなものに非常に驚いたんですね。

一方は会心の演技が出来て、他方では最悪の演奏になった。

その中に、三島由紀夫と崇徳上皇というのが私にとってはちょっと、向き合わなきゃいけない2人の霊があって、その三島由紀夫と崇徳上皇の霊に向き合う自分のありようみたいなものがね、そこでこう何と言うか、露になったみたいな。

音が出ないからと言って悪くはなかったですよ。

私はもう音が出ないまま吹いたんですよ。

それも初めてで、無音の状態で、無音と言っても「スース―」というのだけれど、「スース―」いう状態でもちゃんと吹き切るという思いが、自分にとって初めての経験で、全く音が出ない状態で、何か禅みたいな、禅をやっているのかみたいな、この世に曲という世界は吹いていないけれども、だけど私は音は全く出ていないのに曲を吹いていると。

そういう禅の公案みたいな状態に入って、非常に何か得るものが、考えさせられるものがありました。この前。

崇徳上皇を祭っているのは白峰神宮ですね。

金剛流では崇徳上皇の曲に『松山天狗』という曲があるんです。

最近ですか。それがだいぶ前で、5年くらい前に観世で復曲をされました。

銕之丞先生とか幽雪先生とかが舞っておられました。

観てみたいですね。

要は蹴鞠とかするということで、soccerの選手の人とかが。そうですね。

それでさっきの笛の音なんですけれど、能管、能の一番初めに菱木というのがあるのですよ。その時に僕はあの世の扉が「ぴゅっ」と空いて、そこから亡霊がやってくるような。

ふーん。一番初めと一番後に菱木という高い音が「ぴゅっ」とするんです。

それで、能管というのは、その中にもう一つの管が入っていて、遠くまで音が聞こえる。

あれは本当に非常に不思議なものです。

だから2人が揃って合わせることができないのですよね。

どうして音が出なかったんですか。どうして出なかったのか。

その後でまた修理に出したとmailing listに書いていましたよね。そうそう。

まぁ怨霊で音が出ないようになってしまったということですね。

怨霊なのかどうなのかというのはまた。じゃあ、今日はここまでにしましょう。



**四、感想および考察と次回の予定**

① 4月の世阿弥研究会では世阿弥能楽論集『花鏡』の続きから講読を行い「知二習道一事」(習道を知ること)の続きから「上手之知レ感事」(上手の感を知ること)まで講読を行った。

② 「知二習道一事」(習道を知ること)の続きでは、当今の年若な役者の芸境を比較して、段階的に順序を踏んで一つ一つしっかりと技を練習することの重要性と見まねでその場だけの演技をしていてはいけないということを理解することができた。

③ また能の略式に関しては、手に入り切った得意の能を看板の演目に定めておいてその中へ新しい能を交えていくと、古い能も新しい能も両方とも新しく感じられて、それこそが「真の花」となり目指すべきところであるということもあった。

④ 「上手之知レ感事」(上手の感を知ること)では、上手を極め名人となっていくためにはどのようなことが必要か理解をすることができ、さらにその上のこころのはたらきを超えた境地である「感」を具備するところにまで至ると世間の名声を一身に受ける位にまで芸境を高めていくことができるということも学ばせて頂くことができた。

⑤ 5月5日の「青嵐大会」では、河村博重先生が最初の曲から地謡としてや後見として何度も出演をされておられて、他に見台を使っての素謡の曲もあり、男女を問わず多くの先生方の美しい舞いや謡いの数々を見させて頂くことができた。

⑥ また先生方の謡いを通しては昔の人々が生きて体験してこられた時代や世界の様子が臨場感を持って伝わってくると同時に、研究会の中でも河村博重先生がおっしゃっておられた「鏡の間」でのこの世とあの世のエピソードの感覚についても考えることができたように思われた。

⑦ ポルタギャラリー華で開催されていた伊庭貞一先生の「能面展―近江の能を訪ねて―」では先生の造形をされた能面の数々を観させて頂きながら能面が造形される過程についてもお話を伺い、300年以上にわたりこの地上を支えてきた木の中から能面師の先生によって翁をはじめとした能面が作られていくことをしっかりと理解させて頂くことができた。

⑧ そこから能楽師の先生が面を掛けて能舞台の上で舞っていらっしゃる時にはそれだけの長い時を経て地上を見てきた木の中から翁や中将や女や精霊や鬼の面が面打ち師の先生の手によって造形され、舞っているんだという理解もさせて頂くことができたようにも思われたところであった。

⑨ 5月の世阿弥研究会は、5月22日(火)18時より河村能舞台の楽屋で行われ、講読は『世阿弥能楽論集』「花鏡」の213頁「浅深之事」(浅深のこと)からである。

**参考(参照)文献・資料一覧**

① 小西甚一編訳『世阿弥能楽論集』「花鏡」たちばな出版, 2004, pp.188～238.

② 西野春雄,羽田昶編集委員『能・狂言事典』平凡社, 1999,

『葵上』『敦盛』『雲林院』『小鍛冶』『隅田川』『道成寺』『藤戸』『二人静』『船弁慶』『松山天狗』pp.13～14、pp.17～18、pp.30～31、pp.62～63、pp.79～80、pp.107～108、pp.129～130、pp.130～131、p.132、p.139.

③ 小林保治,森田拾史郎編『能・狂言図典』小学館, 1999,

『葵上』『敦盛』『雲林院』『小鍛冶』『隅田川』『道成寺』『藤戸』『二人静』『船弁慶』

『松山天狗』p.17,p.45,p.133,p.150、p.14,p.16,p.133,p.150、p.17,p.184、p.17,p.156、pp.16～17,p.130,p.159、p.17,p.53,p.149、p.17,p.228、p.16,p.229、p.17,p.165、p.17.

④ 丸岡明 著『能楽鑑賞事典』河出書房新社1961,

『葵上』『敦盛』『雲林院』『小鍛冶』『隅田川』『道成寺』『藤戸』『二人静』『船弁慶』

『松山天狗』pp.78～80、pp.87～89、pp.116～117、pp.188～190、pp.227～228、pp.287～

288、pp.339～341、pp.341～343、pp.344～346、p.358.

⑤ 小林責, 西哲生, 羽田昶著『能楽大事典』筑摩書房,2012.

『葵上』『敦盛』『雲林院』『小鍛冶』『隅田川』『道成寺』『藤戸』『二人静』『船弁慶』

『松山天狗』pp.2～3、p.17、pp.93～94、p.333、pp.493～494、pp.617～618、p.778、p.782～783、pp.787～788、p.840.

「河村禎二」p.215、「観世銕之丞」pp.224～225、「観世栄夫」p.227、「観世元雅」p.229、「三体」p.404、「能管」pp.683～684、「ヒシギ」p.748、「幽玄」p.912、「能面」pp.1028～1048.

⑥ 石牟礼道子,栗原彬,藤原辰史ほか著『現代思想 2018年5月臨時増刊号 総特集◎石牟礼道子』

青土社,2018.

鎌田東二「生類あはれ」の看取り人・石牟礼道子――歩き巫女　不知火背負ひて黄泉帰る

pp.148～156.

成元哲「福島の母親の声と響き合う石牟礼さんの言葉-書くことは言葉にならぬ声を聞くことだ」pp.232～245.

⑦ 高階 秀爾 (著)『ピカソ 剽窃の論理』(ちくま学芸文庫) 筑摩書房,1995.

⑧ Hubert Damisch (原著), 石井 朗(翻訳)『パリスの審判―美と欲望のアルケオロジー』ありな書房,1998.

⑨ 谷沢永一=渡部 昇一(著)『詠う平家、殺す源氏―日本人があわせ持つ心の原点を探す』ビジネス社,2002.

⑩ 紀 友則、佐伯 梅友(著)『古今和歌集』(ワイド版 岩波文庫), 岩波書店,1991.

⑪ 折口信夫著『口訳万葉集(上)(中)(下)』(岩波現代文庫 ; 文芸 ; 287-289),岩波書店, 2017.

⑫ 倉野憲司 (著)『古事記』(ワイド版岩波文庫48) 岩波書店,2014.

⑬ 津本信博編・解説『土佐日記[復刻版]』(日記文学研究叢書 / 津本信博編・解説 ; 第1巻), クレス出版, 2006.

⑭ 寺山修司著『寺山修司著作集』クインテッセンス出版, 2009.

⑮ イエズス・マリアのブルノ著 ; 石沢幸子,カルメル会共訳『十字架の聖ヨハネ』ドン・ボスコ社, 1973.

⑯ ホアン・カトレット著 ; 高橋敦子訳.『十字架の聖ヨハネの霊性 : 無の求道者=神秘家の信仰の道』中央出版社, 1982.

⑰ 水神祥 著『水神傳説』泰流社,1984.

⑱ 福来友吉著『心霊と神秘世界』福来出版, 1993.

⑲ 福来友吉著『透視と念写』福来出版, 1992.

⑳ 鎌田東二著『歌と宗教 : 歌うこと。そして祈ること』(ポプラ新書 ; 020)ポプラ社,2014.

鎌田東二著『常世の時軸』（第一詩集）思潮社, 2018.

三島 由紀夫著『仮面の告白(改版)』(新潮文庫) 新潮社, 2003.

元少年A著『絶歌 : 神戸連続児童殺傷事件』太田出版, 2015.

谷田和一郎著『立花隆先生、かなりヘンですよ:「教養のない東大生」からの挑戦状』洋泉社, 2001.

Novalis著,青山隆夫訳『青い花』(岩波文庫),岩波書店, 1989.

森下洋子著『森下洋子 : バレリーナの情熱』(人間の記録 ; 185),日本図書センター, 2012.

山田雄司著『崇徳院怨霊の研究』思文閣出版, 2001.

田辺尚雄著『邦楽用語辞典』東京堂出版, 1981.

「じょうるり　浄瑠璃」p.92、「じょはきゅう　序破急」pp.93～94、

「しんない(ぶし)　新内(節)」pp.96～97.

「えてんらくいまよう(越天楽今様)」pp.20～21.

音楽之友社[編]『邦楽百科辞典 : 雅楽から民謡まで』音楽之友社, 1984.

「くろだぶし　黒田節」p.341、「えてんらく　越殿楽・越天楽」、p.121～122、

「えてんらくいまよう　越天楽今様・越殿楽今様」p.122、

「びわ　琵琶」pp.855～860.

中村敏雄ほか編『21世紀スポーツ大事典』大修館書店2015.

「エスニックダンス　①競技概要②歴史」pp.1011～1012.

朝岡正雄監訳『日独英仏対照スポーツ科学辞典』大修館書店1993.

「表現舞踊(モダンダンス)」p.460.

「コンテンポラリーダンスでめざす美しさ22.0.02」①「なんでもあり」の魅力

「社交ダンスとヒップホップでめざす美しさ22.0.03」②ヒップホップでめざす美しさ

関直子著『西洋絵画の巨匠7　ピカソ』小学館2006.

青柳正規,渡辺晋輔責任編集『ART GALLERYテーマで見る世界の名画1ヴィーナス豊饒なる愛と美の女神』集英社,2017.「ヴィーナスの誕生」「パリスの審判」pp.12～21.

サラ・カー=ゴム著高橋明也日本語版監修『西洋美術鑑賞解読図鑑』東洋書林,2004.

ルーベンス「パリスの審判」pp.38～39、

サンドロ・ボッティチェリ『サン・マルコの祭壇画』pp.156～157.

ダニエル・ブーン著太田泰人訳『岩波世界の巨匠　ピカソ』岩波書店,1992.

ナショナルジオグラフィック編集「ナショナルジオグラフィック日本版2018年5月号」

「【特集】ピカソはなぜ天才か ?」日経ナショナルジオグラフィック社, 2018, pp.32～59.

島薗進著『スピリチュアリティの興隆 : 新霊性文化とその周辺』岩波書店, 2007.

新聞ダイジェスト社「月刊新聞ダイジェスト」2018年5月号(第52巻第5号　通巻726号)

「特集　東日本大震災から7年　復興はコンパクトな街に　6年間で30兆円の予算を執行」pp.12～21.

「ずっと語り継ぐ　大河照生存者の1人　18歳の覚悟　旧校舎保存　いち早く訴え」p.19.

「今月の社説読み比べ　読み比べ①東日本大震災から7年」pp.61～72.

三島由紀夫著『近代能楽集』43印改版,新潮社, 2004.

石牟礼道子著『石牟礼道子詩文コレクション』藤原書店, 2009.

石牟礼道子著『石牟礼道子対談集 : 魂の言葉を紡ぐ』河出書房新社, 2000.

石牟礼道子著『不知火』第1巻～別巻,藤原書店, 2004.

鎌田東二「この星の光に魅かれて」(CD), Moonsault Project moon001

2「神」

4「泥の鳥ブルース」

13「月山讃歌」

15「まほろば」

白洲正子著『能の物語』(講談社文芸文庫)講談社, 2016.

「二人静」pp.51～58.

「葵上」pp.59～66.

「藤戸」pp.67～75.

「敦盛」pp.105～112.

「舟弁慶」pp.143～156.

「隅田川」199～211.

「道成寺」pp.213～220.

「おわりに」pp.221～225.

戸川純「蛹化の女」https://www.youtube.com/watch?v=1BxgWbqxMzk

閲覧日時、2018年5月19日(土)

戸川純　蛹化の女　ノーマルvsパンク　TOGAWA JUN

https://www.youtube.com/watch?v=WBv4bNC7epM　閲覧日時、2018年5月19日(土)

ディヴィド・クリスタル編集、金子雄司、富山太佳夫日本語版編集主幹『世界人名辞典』

「ノヴァーリスNovalis」東京堂出版,1997,p.684.

ノヴァーリス著 ; 薗田宗人, 今泉文子訳『ノヴァーリス』(ドイツ・ロマン派全集 / 前川道介編 ; 第2巻),国書刊行会, 1983.

「犬島のアートを詳しくご紹介します。瀬戸内芸術祭以外の時期こそ犬島」

http://www.love-voyage.com/entry/2018/03/25/172031　閲覧日時、2018年5月19日(土)

辻信之「寺山修司の身心変容―不完全な死体への質問状」

「身心変容法技法研究会　研究年報第7号」

pp.196～204.　http://waza-sophia.la.coocan.jp/　閲覧日時、2018年5月19日(土)

「片山定期能 4月公演 | 能楽情報 | 能楽文化振興協会」

http://noh-kyogen.org/nohgaku-event/20130413-kyotokanzekaikan/

閲覧日時、2018年5月19日(土)

「宇宙時代の人間・社会・文化 Humanity, Society and Culture in the Space Era」

http://www.usss.kyoto-u.ac.jp/ists11.html　閲覧日時、2018年5月19日(土)

寺山修司著『寺山修司著作集』クインテッセンス出版, 2009.

寺山修司著『寺山修司全歌集』(講談社学術文庫;[2070])講談社, 2011.

福武總一郎, 安藤忠雄ほか著『直島瀬戸内アートの楽園』(とんぼの本), 新潮社, 2011.

鎌田純一著『神道概説』学生社, 2007.

白洲正子著『世阿弥―花と幽玄の世界』(講談社文芸文庫―現代日本のエッセイ)講談社, 2014.

「能面師 伊庭貞一氏 - 中外日報社」

http://www.chugainippoh.co.jp/interviews/wagamichi/20140926.html　閲覧日時、2018年5月21日(月)